



そもそもなんで時計は右回りなのか、という疑問を持たれたことはありますか。

時計の起源は古代バビロニア（BC 4 0 0 0 年頃）の日時計にまで遡ると言われます。世界文明の大半は北半球にありました。そこでは日時計の影は右回りだからです。

自然物利用の時計は紀元前から作られていましたが、現在のような機械式ムーブメントが利用されるようになったのは 13 世紀頃のヨーロッパ。教会の時計塔が周辺の住民に時間を知らせていました。

この頃はまだまだ大型の重りを使った重量時計です。16 世紀に入り、ゼンマイの仕組みが発明されてから時計の小型化が進みました。

現在の腕時計も構造的にはこの時計塔と変わりありません。ただ部品が小型になっただけです。ゼンマイを巻き上げて歯車に伝えていくのが機械式。電池による水晶振動を IC 制御して一秒間の信号を作り出して歯車を回すのがクォーツ。つまり、歯車をまわしていく仕組み自体は変わらないのですね。

さて、一口に小型化といいましたが、時計塔から腕時計に進化させる過程で忘れてはならない人物がいます。18 世紀の天才時計職人

アブラム・ルイ・ブレゲさんです。

この方は腕時計の歴史を 2 世紀早めた人、という評価を受けており、今後もその評価は変わらないでしょう。何しろ、トゥールビヨンやムーンフェイズ・ミニッツリピーターなど現代に残る時計機構の 9 割近くをこの方が発明してます。もちろん覚えておくべき重要人物はまだまだ沢山いるわけですが、3 分で分かる、ということですので割愛します。

そして、1969 年、セイコーがクォーツ時計を発表します。それまでは、日差 10 秒くらい狂っていた時計が、クォーツ時計では一ヶ月数秒しか狂いません。この精度の高さが評価され、70 年代の市場を席卷します（クォーツショック）。スイス機械式業界は、オイルショック（生産コストアップ）、ドルショック（スイスフラン高）に見舞われた上、クォーツ時計の低価格化に対向できず衰退していきました。

ここで、もう一人の人物の名を挙げねばなりません。

ニコラス・G・ハイエクさんです。

彼は経営コンサルの仕事をしてまして、銀行団からスイス時計業界復活の依頼を受けます。

彼の採った戦略は、一に製品、二に製品といわれます。

サプライヤーを多数買取り、ムーブメントの会社も傘下におさめ、手軽で高性能なクォーツ時計、

高級な工芸品としての機械式腕時計、

という棲み分けを定着させました。そして、

安価なクォーツに対してはスウォッチ時計というコンセプトを

ぶつけたのです。鮮やかな色彩、アーティスティックな装い、

少数限定という販売戦略が功を奏して、

財政面でもスイス時計業界は復活し、

現在の高級腕時計のトレンドを牽引しています。

腕時計業界の近未来。

世界経済活性化にともなって、今後も腕時計の

高級化は進むでしょう（現行品が高くなりすぎて、

今後売れる物を探すのが大変です）。

時計業界としては我が日本のセイコーがダークホース的な存在感を持っていると思っています。

精密機械や眼鏡などもやっていますが、

機械式腕時計に特化して気合い入れられたら、

スイス業界もたまらんなあ、という存在だと思います。

スプリングドライブ一つ採ってみても超絶技術です。

トライシンクロレギュレーターなんてものは、

セイコーにしか作れません。

doppel では引き続きムーブメントに着目し、

アンティーク時計での適正価格のイイ商材を探していきたいと思います。

（去年はオールドインター来ましたね）。

今後とも機械式腕時計専門店の doppel ブログを

チェックしてくださいね。時計業界の明日が見える！（かも）。



代表

清水 義孝

SHIMIZU Yoshitaka

E-mail : shimizu@doppel.biz

ドッペルコーポレーション

〒305-0005 茨城県つくば市天久保2-9-5パインヒルズツクバA-01

Tel/Fax : 029-854-7035

URL : http://www.doppel.biz